

Group3

(丁雷、加賀谷まどか、香月静佳、村上遥香、中本智博、滝尾奈絵、堤ともみ、山平綾也、吉丸尚弘)

「先進国と発展途上国の教育の視点」

<前書き>

私たちは教育問題に対して先生の講義、話し合い、結論の3部よりアプローチしていった。その結果を以下3部にわたり説明していく。

第1章 教育における問題

今回のセミナーにおいて「教育」という一大テーマに対して多くの先生方が様々な見地より問題点を顕してきた。その一部を紹介すると、

- 1 画一的な教育が行われている (白川先生)
- 2 学校から仕事への移行のサポートが不十分 (本田先生)
- 3 地域社会における教育の希薄化 (西出先生)
- 4 NGOへの政府サポートの不足 (趙先生)
- 5 文化保護を経済発展が邪魔をする (趙先生)

などがある。しかしこの問題は表面上の問題にすぎない。本当に問題となっているのは先進国が「人」を、発展途上国は「国」を重視してしまい、お互いの位置に差違が生じてしまっていることである。先進国は自らの教育システムが完成された上で問題提起しているのに対し、発展途上国は教育システムを成立させる段階において問題提起していることがその原因だ。

これからこの問題についてどうすれば解決に繋がっていくのかを第2章で示していくこととする。

第2章 「人」と「国」の考察

ここでは、先進国が「人」、途上国が「国」に重点を置いていることについて考察していく。先進国が「人」の発展に重視している中に多様性・柔軟性・人間関係の3本柱が挙げられる。白川先生は「個人の好奇心を育み、その多様性を認めるべき」と述べられた。学歴社会・詰め込み教育の結果、社会が敷いたレールを歩くことを強制され、それが画一的な人間の増加につながった。また、日本は文化的にも仲間意識が強すぎるという部分があり、それは排他性の強さに繋がる。同種を求める日本文化においては、それが非正規雇用から正規雇用への脱出が困難という点でも問題になっている。さらには、NEETの問題が生まれた背景には雇用の問題が大きく関係しており、それらの問題を解決するポイントとして多様性と柔軟性が挙げられる。セッション3で教養について講義された竹内先生、ソーシャルキャピタルの必要性を述べられた西出先生はそれぞれ人間関係の重要性を述べられた。実利主義が横行する中で、教養というのは「必要だから身につける」ものではなく、

教養を高めることで社会全体の文化の向上に役立つものである。また、人間的な成長の中で教養が占める役割は大きく、より良い生活を送るために重要であり、それらの教養を身につけるのは書籍のみでなく、人間関係が重要なものとなる。一方で、希薄となった人間関係で構築される社会では様々な問題が浮上しており、それらの解決策としてソーシャルキャピタルが挙げられた。ある程度発展した経済社会の中において、次に重要視されるべきものは人と人との繋がりではないだろうか。そこで、ソーシャルキャピタルを定義することで、信頼・ネットワークといった目に見えないものを再認識することができ、問題解決のアプローチを考察することを可能にした。これらは先進国の問題を解決するための問題を講じられたものである。

一方、途上国においては、「人」の器となる「国」をまず作ることが求められる。そこで留意すべき3つの観点があるが、それらはどれも、経済的基盤をどう充実させるかが大きな課題である。まず1点目は教育環境を充実させる必要性である。タマン先生によると教育システムが整っていないために、人材が外国に流入する点が指摘された。またリッチモンド先生や趙先生は、教育への意識の低さや、学校施設の不備のために教育を受ける機会が奪われている例を指摘された。例えば、学校が遠く、しかもトイレがないために学校に行かない生徒がいるのである。2点目は、教育を充実させるために必要な本当のニーズを的確に捉えることである。NGOやODA等によってなされる経済援助が、実際にその土地の人々の必要性と合致しているのかを把握するのは容易ではない。そこに現地の人々と援助国側の人々をつなぐネットワークが必要となるであろう。またNGOに対して政府の理解が得られない例が存在するという。3点目は文化保護の観点である。その土地ごとに民族や宗教等と係わる固有の文化が存在している。開発によって固有の文化が変容を迫られ、破壊される場合もある。また逆に文化を保護したいがために、その土地の人に切実な経済発展が阻害される場合もある。このように、文化の保護と教育の充実に必要な経済発展は両立するのが難しい問題でもあり、文化自体は破壊されるのではなく変容するだけだと捉えることもできる。

以上のとおり先進国と発展途上国とはそれぞれに教育に求められることが異なることが明らかになった。その差異を意識した上で教育に関わる必要がある。先に述べたように、先進国は経済発展を重視した政策を行ない「人間」についての視点を失った状態で発展を続けてきた結果、様々な問題が浮上した。一方で、途上国は経済発展を第一にするがために先進国が抱えた問題を再度抱える可能性は十分に考えられる。しかし、だからといって途上国の人々にとっては生活が第一であり、将来途上国が抱えるかもしれない問題を先進国の視点で一方的に解決できるものではない。

第3章 これからの理想像とは…

2章において「先進国と途上国では教育に対する視点が異なり、それらの差異を十分に考慮すること」が重要ということが分かった。これらの議論を通じ、私たちは「発展途上国が先進国の教育成長に巻き込まれたために、自国自身の特徴ある教育システムを捨て、先進国についていかなければならないようなシステムが完成してしまったことこそが真の問題なのではないだろうか。そして、その原因として発展途上国が自身の弱い経済力の補助を先進国に頼んだことでグローバリゼーションの波に飲み込まれてしまったことが挙げられる。」という結論に達した。（ここで注意してほしいのは問題なのが発展途上国が先進国を頼みとしたことではなく、先進国が発展途上国を自らの敷いたレールの上に乗せて彼らの未来をも先進国が掌握してしまったことである。）

そこで私たちは「先進国は発展途上国に対して自らのレールに引き込むのではなく、あくまで自らの過去の失敗を元に彼らにアドバイスをする立場にとどまり、彼らの自由な成長を促進していくことが大切である」ことを提言したい。ただ提言を実現していく上でどのような政策を採ったら良いかに関しては多種多様な方法があるがここからは敢えて皆さんにも考えてほしい。「どうしたら発展途上国をよい方向に導けるか?」「どうしたら先進国の意識改革につながるか?」この疑問の元に各国が積極的な政策に取り組めばこの問題は解決とはいかないかもしれないが必ず前進すると私たちは信じている。

